

南の風 417

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

引用の続きです。

自分自身を振り返り学び壊すことが、教えずして人を伸ばす「教えないスキル」を探求する出発点になりました。

409号から「教えないスキル」の引用抜粋を続けてきました。

私がこの本と出会ったのは、今年の2月頃でした。店頭で指導に関する本を見ていたときに、気になったのがこの本でした。サッカーのコーチングのみならず、人材育成術にも触れていて興味を持ちました。

バスケットボールの指導にも通じるものがあると感じたので購入しました。特に惹かれたのは、『選手が気づいて→判断して→プレーする』といったコーチングの方向性です。

また、「自分で考える力を育む」といった選手の主体性を重視することは、永田台ビーバースのチーム目標である、バスケットボールを通して『自立を目指す』ことにつながると思ったのです。

ここまで、「教えないスキル」の、**第1章「自分の言動に意識を持つ」**を抜粋して引用しました。

読者の皆様もお読みになって、いろいろ考えをお持ちのことと思います。著者の佐伯氏の考え方が絶対というわけではありませんが、氏の考え方を「受け取ってみる」意義は大いにあると私は感じます。

ここで、第1章「自分の言動に意識を持つ」から、私の考えを交えて書きます。バスケットボールのコーチの立場として考えます。

《何事も俯瞰で見る》

例えば選手への声かけに、こうしろ、ああしろという指示、命令。ダメ出し、否定してしまう場合があります。そういうことに自分が気づくことが大事だということです。自分がおこなっているコーチングを、もう一人の自分が客観的に見る、ということ意識することが必要だと思いました。

私もそうなのですが、ゲームでのベンチワークの際、「そこはパスじゃない、自分で行け」、「左が空いている」、「走れ」など、一つひとつのプレーに反応してリアクションコーチングしてしまうことがあります。こうした指示は果たして選手のために有効なのか、リフレクションすることが大切なことだと思います。

なぜ自分がその言葉をかけているのか、なぜパスしてはだめなのか、選手が判断したことがどうしてだめだったのか、自分のメッセージに『意図を持たせること』の重要性に気づかされました。

《古い慣習を壊す》

コーチは、自分が思う理論やスタイル、この選手はこのポジションをやらなきゃならない、勝つためにはこういうシステムで臨まなければいけないといった、確固たる信念を持っている方が多いと思います。信念を持って指導に当たることは大事である反面、視野が狭まり、他者の意見、考えを受け入れられなくなる危険性もあります。コーチとしての成長が止まってしまう要素にもなりがちです。

自分が信じてやまない、といったことにこそ疑ってみる（学び壊しをして、学び直しをする）ことで、多くの気づきが得られるのではないかと、思います。

次号に続きます。